大官大寺の縄文土器（1）

はじめに

1970年代におこなわれた大官大寺の発掘調査では、中期末～後期前葉と、後期末～晩期前葉の縄文土器も出土している。とくに1977年の第４次調査では縄文時代の包含層が確認され、西北調査区での下層の調査では縄文時代の遺構も検出されている。土器資料の一部は公表されており（『藤原概報８』）、近畿地方南部における中期末土器群の一定点となっている。近年、関西の縄文中期末の土器に関しては、研究の当初に注目されていた小地域性に再び焦点があてられるなど、研究の展開が認められる。ここでは未発表となっている縄文土器を報告することにより、研究の新たな動向に資することにしたい。

整理にあたっては以下の方針をとった。①対象は、まとまった量がある第４次調査と、少量ながら良好な例のある第１次調査出土土器とし、報告済みの土器は除く。②接合と同一個体認定は大まかにおこなう。③資料化は口縁部片と底部片を対象とする。前者では５㎝以上で口縁端部の残存しているもの、後者では底径が復原できるものに限定した。表４に土器の全量と、資料化の対象となった土器の数を示した。以下の説明では、とくに断らない限り第４次調査出土品を指す。

第４次調査の遺構出土土器

遺構の理解で不十分な点もあるが、当該期の遺構出土例の少なさに鑑みて、土坑出土品のみ報告することにする。１～４はSK315出土とみられるもの。注記内容が『概報８』の22と同じで、時期的にも２と一致する。５～７はSK321出土とみられるもの。以上は下層調査区内で地山を掘りこんだ、縄文時代の土坑である。なお本遺跡の縄文時代土坑は、帯状にのびる礫層に沿うように南北に点在している。本遺跡は飛鳥川右岸の比較的低湿な環境にあるが、こうした特徴は、本郷大田下遺跡など近年増加した列島西部の貯蔵穴の調査例と類似する点は注意しておくべきだろう。８・９、10～16、17・18も各土坑から出土したもの。これらは下層調査区の範囲外にあり、縄文時代の包含層を掘りこんだ土坑とみられ、現状では時期不明といわざるをえない。今後、他時代の遺物の出土状況などを含めて検討する必要がある。12・13

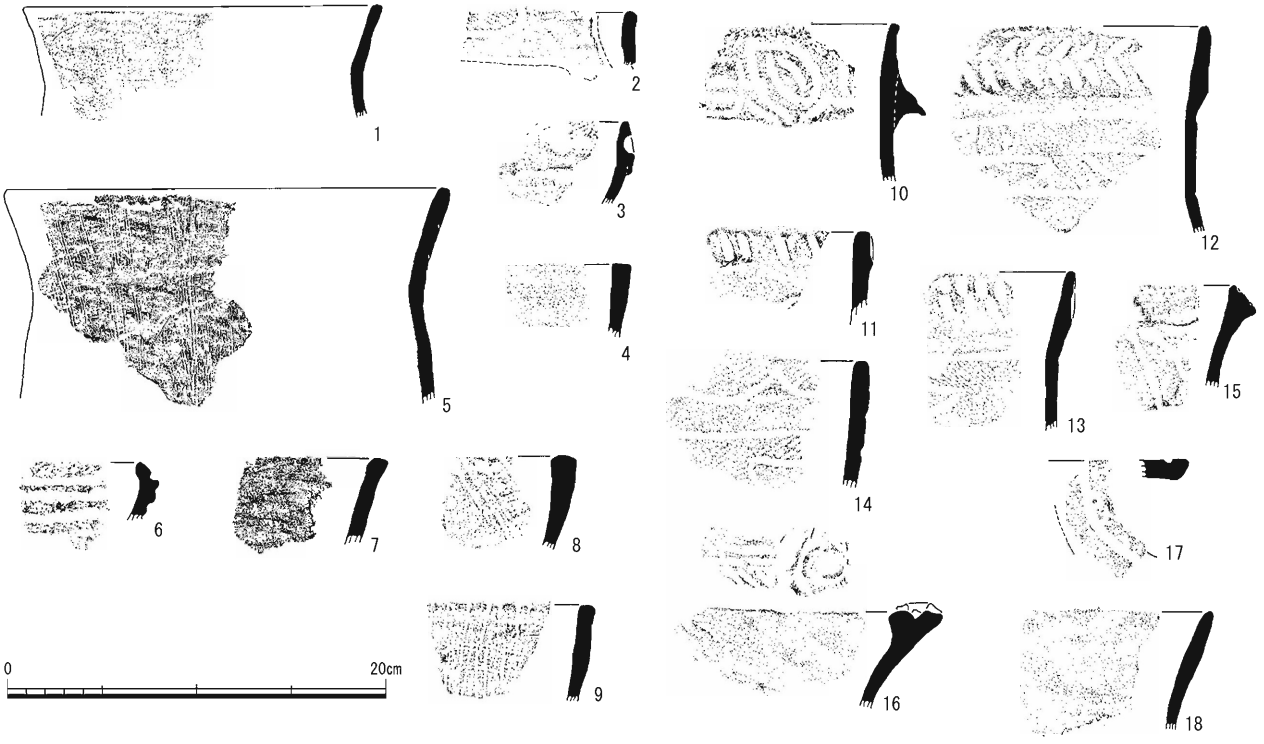

図36　土坑出土土器　1：4

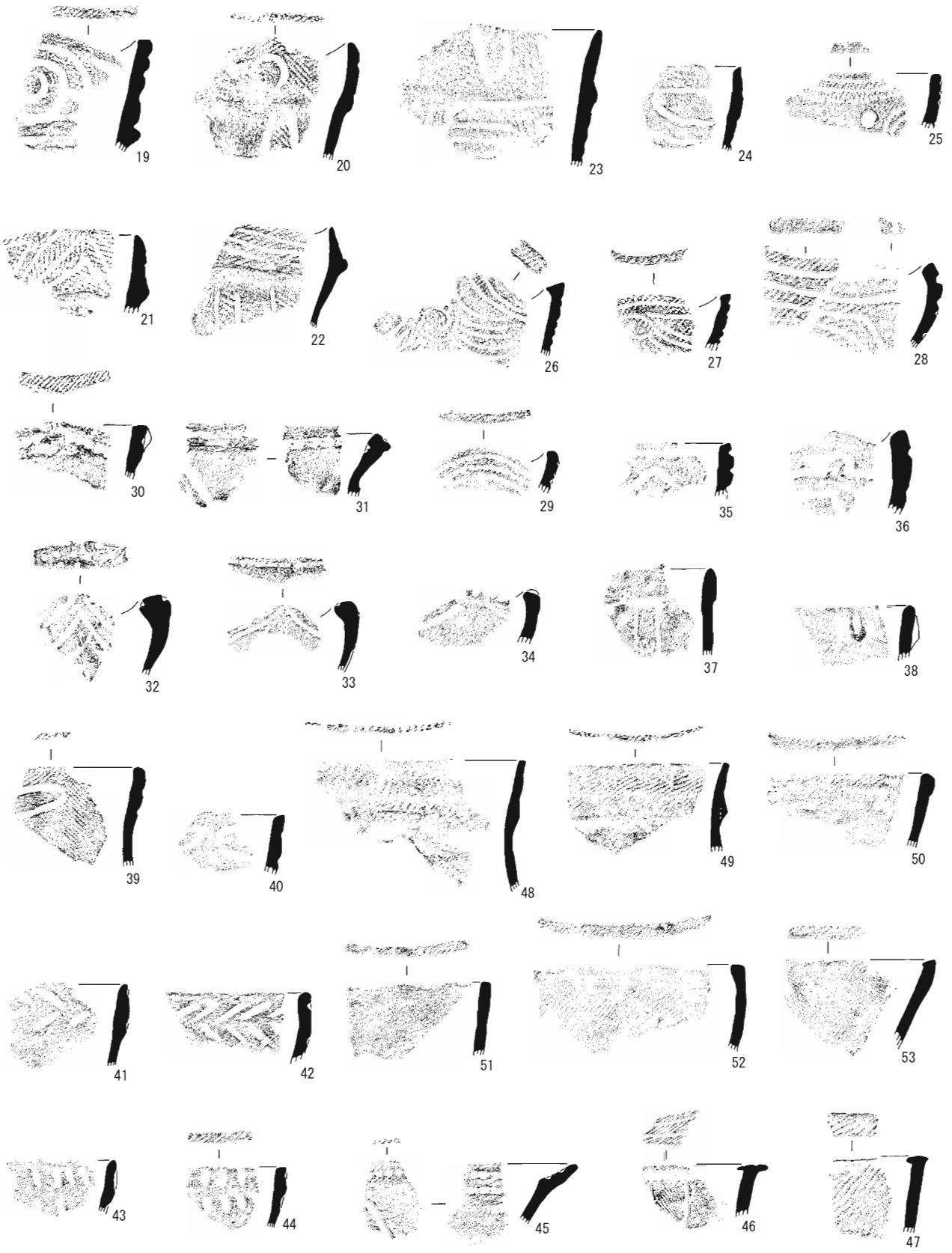

図37　中期末～後期初頭の土器１　1：4

は口縁部隆帯下に１条沈線と窓枠状のモチーフをもつ。沈線の一部をナデ消し窓枠状モチーフを描出する手法は、口縁部隆帯のない14の口縁部モチーフに似る。中期末～中津式移行期のものとして興味ぶかい。

包含層等出土土器

ここでは中期末～後期初頭の有文土器を中心に報告する。条線文、全面縄文、無文土器等については後期～晩期の土器と併せて、改めて紹介する機会を設けたい。19～22は深鉢Ａ１類[1]。資料化対象内で口縁部主文様に渦文をもつ土器は僅少で19と、口縁部主文様が円文に退化し胴部に磨消縄文をもつ北白川C式でも新しい部分に位置づけられる20のみである。第1次調査出土の23は深鉢Ａ２類か。24～28は連弧文をもつ深鉢Ａ４類。中期末でも古いもので、『藤原概報8』で報告された同様の特徴をもつSK320の資料は北白川C式２期に位置づけられている。これにより本遺跡は深鉢Ａ４類の印象が強くもたれているが、資料化対象内では必ずしも多いとはいえない。25は押引沈線で文様を描出するもの。29～38は深鉢A類の範疇とみられる土器を一括しておいた。29は波状口縁に３条の押引沈線文を施すもので、26や27と同じく深鉢Ａ４類か。38は縦長の浮文をもつ土器。39・40は口縁部に隆帯や屈曲をもたず、楕円区画文で胴部との区分をする土器で深鉢Ａ５類にあたるとみられる。41～47 は奈良県下で特徴的に認められる土器。41～44は口縁部に短沈線文を施すもので、羽状に施すものと、短く垂直に施すものがあるが、資料化対象内では双方を含めて数点程度にとどまる。45～47は口縁が肥厚する土器。48～53は沈線を伴わない帯状の縄文帯を有する、いわゆる帯縄文土器で、北白川C式の新しい部分から後期初頭に位置づけられるもの。口縁部に隆帯を有するものと無いものがある。53は面取りする口縁端部が内傾しており、鉢形の器形である可能性がある。

54は深鉢B類で、突起化した橋状把手をもつ。55もこれに含まれる可能性がある。資料化対象内の深鉢B類はこれで全てである。

56～60は深鉢C類。第1次調査出土の56は内面に凹点があり北白川C式でも古いもの。57～58は口縁部が台状の山形になるもの。こちらは北白川C式の新しい部分のもので口縁部に楕円文、波頂部下には直線的沈線のモチーフがある。60は山形の口縁になるものか。深鉢C類の量は数点にとどまっており、深鉢B類と同じく本遺跡では僅少である。61～75は幅の広い磨消縄文をもつ土器で深鉢Ａ６類にあたる。ほとんどが中津式だろう。61は第１次調査出土。76～79は口縁部に隆帯をもちながらも、沈線や縄文のない土器。帯状文土器から縄文施文を差し引いたものと理解できるが、量は多くない。80～87は浅鉢。積極的に掲載する方針を採ったので、数多くみえるが、全体では１～２割以下にとどまるだろう。80は突起化した橋状把手をもつもの。上面観は三角形で、口縁が外屈する器形である。胎土は非常に精良。82も精良な胎土をもつ。口縁端部を水平に置いたが、あるいは内屈する器形か。83・84は幅広の磨消縄文をもつもので、中津式だろう。これらに関しては、胎土に精良さを欠く。86・87は同一個体とみられるもの。口縁部が屈曲する器形で、口縁が波状になる可能性がある。内外面ともミガキに近い丁寧なナデ調整され、胎土も比較的精良である。88は底部片のうち、文様をもつ唯一の例である。３単位の垂下沈線の間に、蛇行垂下沈線を棒状工具で描く。

表４　縄文土器の全量（報告済含）と資料化対象数

	整理箱	口縁部	底部
第1次調査	2箱	3点	１点
第4次調査	38箱	228点	93点

まとめ

深鉢の器種では、B・C類の量が極めて少ない。とくに奈良県下では一定の組成を占める深鉢C類の少なさが際立っている。また器種では標識遺跡である北白川追分町遺跡では明瞭でない短沈線文、口縁肥厚、帯縄文土器といった奈良県下に特徴的な土器が認められる。前2者はさほど多くはないが、帯縄文に関しては一定の組成を占めているといえる。これまで、本遺跡は北白川C式でも古い部分に位置づけられることが多かった。だが、中期末から後期初頭に限って評価すれば、深鉢A類の器種や帯縄文の存在から、北白川C式の古い部分を含みつつも新しい部分から後期初頭までの資料を多分に含んでいるとできる。

なお本報告をまとめるにあたり、石田由紀子氏に多大なる教示と協力を得た。

（加藤雅士／任期付研究員）

註

1）泉　拓良「中期末縄文土器の分析」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ』1985

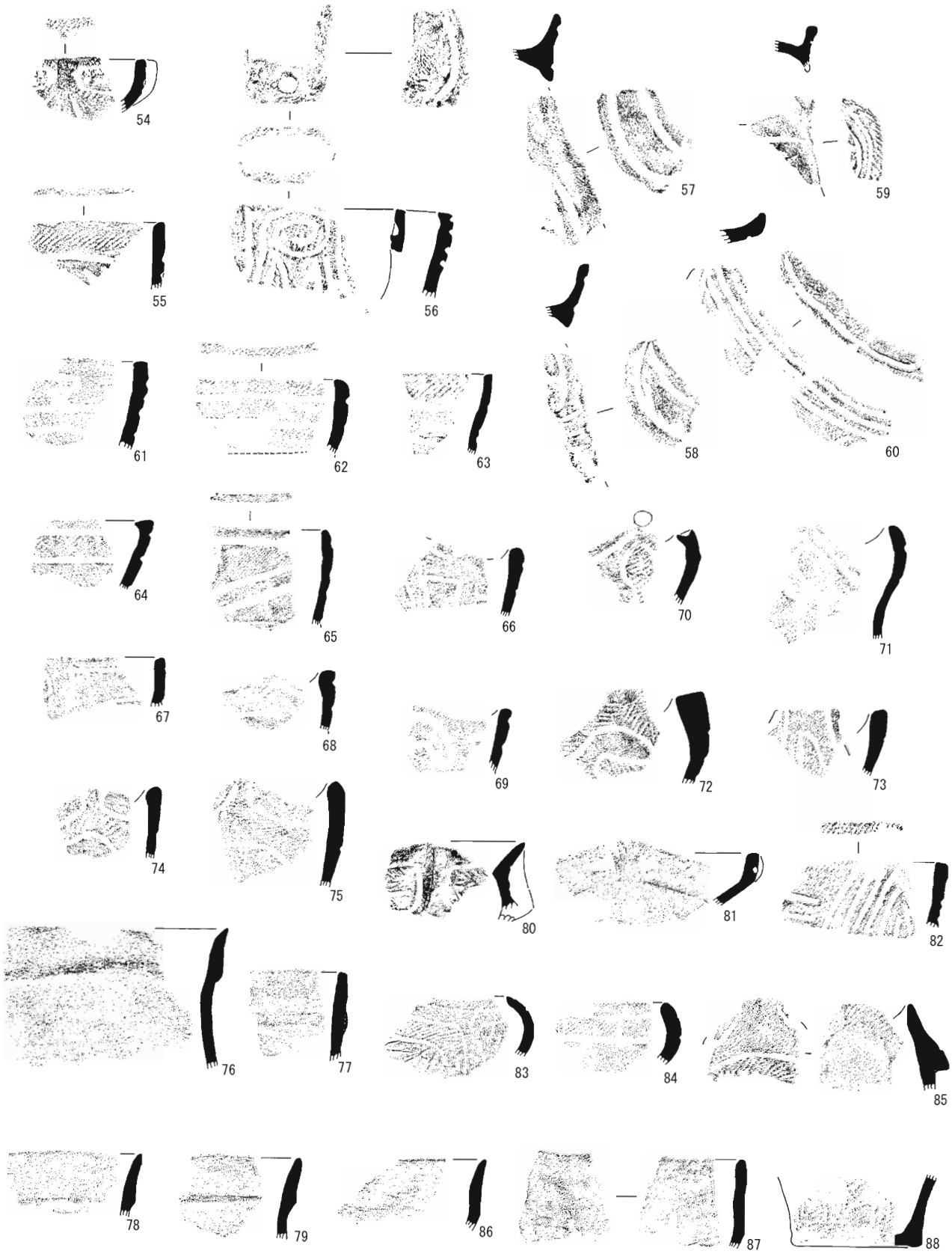

図38　中期末～後期初頭の土器２　1：4